

言語使用のあり方は言語外の対象によって決められる

～ラッセルのパラドクスに関するウィトゲンシュタインの解明について
(野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』第4章の分析)

2022年12月28日

宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

本稿は、野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』(筑摩書房、2006年)の第4章(75～99ページ)の分析である。1～3章については、

「語りえない」ものとは? ～野矢茂樹著、ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む、第1～3章の分析

http://miya.aki.gs/miya/miya_report35.pdf

で既に分析している。事態、事実、対象、命題、名、像といった用語のより正確な位置づけ、言語の有意味性の問題について考察した。

第4章はラッセルのパラドクスに対するウィトゲンシュタインの見解に関する内容である。私はラッセルのパラドクスについて、

ラッセルのパラドクスに関して:「二階の述語論理」の問題点

http://miya.aki.gs/miya/miya_report34.pdf

をまとめたのだが、本稿はウィトゲンシュタインの見解を参考にして上記レポートからもう一步進めた内容になったと思う。主な論点は次のとおりである。

- ・ウィトゲンシュタインの解明は(ウィトゲンシュタイン自身、あるいは野矢氏の説明とは異なり)実質的に「言語外の対象」が前提となっている(ただそれを無視しているだけ)。有意味な論理空間(有意味な言語表現)かどうかは、言葉の対象として事実・事態が現れうるのかどうかで決まるからである。
- ・命題の有意味性を前提にしているため(=実質的に言葉と対象の関係を前提にしているため)、結果としてウィトゲンシュタインは、ラッセルのパラドクスが言葉と対象との関係を歪めたために生じていることを明らかにすることができている。
- ・しかし(野矢氏の説明による)ウィトゲンシュタインにおける可能世界とは、時に実現可能性であったり時に想像(空想)可能性であったりというブレが見られる。

野矢氏は、

ウィトゲンシュタインが解明に用いる関数はそのような言語外の対象をいっさい要請しない。あくまでも言語の中にとどまり、われわれの言語使用のあり方を整理する道具立てにほかならない。(野矢、93 ページ)

と解釈されているのだが、言語外の対象の有無が言語使用のあり方の前提となっている事実を認めさえすれば、ウィトゲンシュタインの説明をよりクリヤーに理解でき、さらにウィトゲンシュタインの解明における問題点を指摘することもできるのである。

<目次> ※ 0内はページ

1. ウィトゲンシュタインの解明は実質的に言語外の対象を前提としている (2)
 2. 言葉の持つコンテキスト、さらに想像可能性と実現可能性と論理空間 (5)
 3. そこには言葉 (名・命題) と事態しかない～ウィトゲンシュタインの言語観における問題点 (7)
 4. (見せかけの) 自己言及文において「定義域が変化する」「関数は同一ではない」とは具体的にどういうことなのか (11)
 5. そもそも $\omega(\omega)$ 、 $x(x)$ という関数は成立しうるのか (13)
- 引用文献 (14)

1. ウィトゲンシュタインの解明は実質的に言語外の対象を前提としている

ウィトゲンシュタインの手法は (あくまで野矢氏による説明ではあるが)、

ポチ関数「ポチ- x 」——定義域..... {「白い」、「走る」}
値域..... {「ポチ-白い」、「ポチ-走る」} (野矢、89 ページ)

と関数をシンプルに定義することで、言語表現のあいまいさ (による意味の歪め) を排することに成功していると思う。

定義域には「白い」や「走る」のようなタイプ1の名、すなわち性質語が含まれ、タイプ0の名は含まれることはない。つまり、「ポチー走る」は有意味であるが、「ポチーミケ」はナンセンスである。(野矢、94 ページ)

ある名の定義域に自分自身が含まれている場合に自己言及が生じるわけだが、定義域に含まれているということは、その結果として出力される自己言及文が有意味な命題として値域に含まれていることを意味している。つまり、その自己言及文はなんらパラドクスを引き起こすものではないはずである。逆に、その自己言及文がナンセンスであるならば、それは値域に含まれていないということであり、それゆえ定義域にも自分自身は含まれていないのである。とすれば、その場合にはパラドクスを引き起こす文を作ることはいかなることもできないことになる。(野矢、95～96 ページ)

・・・つまり、命題が有意味である限りパラドクスが引き起こされることはない、そういうことである。パラドクスを起こすということは、もともとの命題がナンセンスであった、意味をなしていない文章であった、ということである。

それゆえ、

もしその自己言及文がナンセンスならば、定義域から自分自身を排除すれば良い。解明とはそういうことである。しかし、定義域に自身が含まれていないならば、自己言及文を作ることはいかなることもできない。かくしてラッセルのパラドクスは生じない。(野矢、96 ページ)

・・・話は非常にシンプル、かつ明瞭である。

この一連の説明に関して、野矢氏は以下のように説明されている。

フレーゲにとって関数とは世界の対象とともに働く実質をもった道具立てであり、だからこそ、関数それ自身も対象として再び関数の入力項になりえたのである。しかし、「論考」の場合は関数はただ言語のあり方を整理するための便法にすぎない。それはそれ自身対象となりえるような実質をもたない。ただの入力項たる名と出力項たる命題の対照表にすぎない。いわば、ウィトゲンシュタインは関数を徹底的にノミナルに捉えるのである。(野矢、91 ページ)

しかし、本当にウィトゲンシュタインはただ「言語のあり方」を整理しただけなのだろうか？ そもそも言語のあり方を整理するとはどういうことなのだろうか？ “関数をノミナルに捉える”とはどういうことなのだろうか？

ウィトゲンシュタインが解明に用いる関数はそのような言語外の対象をいっさい要請しない。あくまでも言語の中にとどまり、われわれの言語使用のあり方を整理する道具立てにほかならない。すなわち、「ポチ - x」等の穴あき命題は、名を定義域とし命題を値域とする、言語内的な関数なのである。かくして、名にタイプの階層性が認められるとしても、それは個体などというものに訴えるのではなく、われわれの言語使用のあり方を分析することによるのでなければならない。(野矢、93 ページ)

ウィトゲンシュタインの解明には本当に”言語外の対象”が必要ないのだろうか？ “言語使用のあり方” が言語の中だけで説明できるものなのだろうか？

『論考』においては、前章までに見てきたように、事実は対象の配列であり、命題は名の配列にほかならない。そして名は対象の代わりとなる。ここにおいて、すべては一律に「名」として捉えられている。(野矢、87 ページ)

名はさらに固有名や性質語、関係語に区別される。また、そうした品詞カテゴリーとは別に、ある名には、意味上それに特有の結合可能な名の範囲がある。(野矢、87 ページ)

・・・名が対象の代わりになるということは、名は常に対象の存在を前提としているということなのではないのか？

そもそも文章(命題)が有意味であったりナンセンスであったりするとはどういうことなのだろうか？ 「ポチは白い」という情景を想像したり描いたりできるからこそ、つまり事態として現れうるからこそ有意味なのであり、「白いは重い」「ウィトゲンシュタインは2で割り切れる」は想像したり描いたりできないからこそ、つまり事態として現れえないからこそ、ナンセンスなのである。

つまりウィトゲンシュタインの”解明”は実際には言語外の対象の有無が前提となっていることを単に無視しているだけなのである。



2. 言葉の持つコンテキスト、さらに想像可能性と実現可能性と論理空間

野矢氏は富士山関数「富士山-x」の値域・定義域について下のように説明している。

富士山関数「富士山-x」の場合には、「富士山-白い」はよいが、「富士山-走る」はナンセンスとなる。そこで、定義域は {「白い」、「噴火する」} であり、値域は {「富士山-白い」「富士山-噴火する」} である。(野矢、89 ページ)

・・・ここで「富士山-走る」(野矢、89 ページ) は論理空間としてナンセンスと言い切れるのかどうか・・・山から突然足が生えて走り出すような漫画を描くこともできるし想像・空想もできる。しかし現実世界を考えるとナンセンスである。そんなことは起きない。

しかし見方を変えれば、地殻変動、プレートの移動により山が地球上を移動する。これをすごく長いスパンで見れば「走る」と言えなくもない(?)。ただ富士山の生成過程を考えればやはり走ってはいないか・・・しかし富士山ではない他の山に関してはそういうことが言えるかもしれない。このように「富士山-走る」あるいは「山-走る」という命題は「走る」という言葉をどのように解釈するかによっても論理空間として成立するかどうか見方が変わってくる可能性があるのだ。

とりあえず「走る」という言葉を、人間や動物が走るような意味として解釈するとすれば(ムカデやヘビはどうなるのだろうか?)、「富士山-走る」「山-走る」という命題(?) は実現可能性としてはナンセンスで、想像可能性としてはナンセンスとは言い切れないのではなかろうか。いや、そんなこと想像などできない、そもそも足がついている時点で山ではないよという人がいるかもしれないが・・・

「ウィトゲンシュタインが宇宙飛行士となってロケットに乗って旅立つ」というのは現実世界を考えると、ウィトゲンシュタインの時代に宇宙飛行できる技術などなかったのだからナンセンスだが、想像はできる。ウィトゲンシュタインが宇宙に行っているいろいろな冒険をするという物語を作ることでもできそうである。実現可能性を考えれば(過去を変えるということは)ナンセンスであるが、想像可能性を考えれば論理空間にある命題であると言えるのではなかろうか。

「ウィトゲンシュタインは2で割り切れる」は具体像を想像すらできない。ウィトゲンシュタインの体が真二つになってしまうという想像はできるかもしれないが(すみません・・・)それが2で割り切れるということではないだろう。しかし人によっては体積や体重で二等分すれば良いのでは、と考える場合があるかもしれない(物騒な想像で本当にすみません)。

このようにその言語表現が論理空間の範囲にあるか否かは、その言葉をいかに解釈するかというコンテキストの問題が実はあるのだ。その言語表現が指し示す対象が具体的にいかなるものを指しているのか、その解釈が明確に(具体的対象として)指し示されていない

限り、論理空間の範囲にあるか否かを決定することさえできないのである。

とくに論理学においてはそのコンテキストの問題をすっ飛ばした上で論理を勝手にアプリオリであるかのように取り扱ってしまっている。もちろん野矢氏やウィトゲンシュタインについても同じである。

さらに別の事例を考えてみよう。ある同一人物、たとえば私の知っている A さんという人が、分身の術のようにそこに二人いることを想像はできる。映像として表現することもできる。しかし現実として考えるとナンセンスである。あるいは「昨日午後 1 時に A さんは自宅にいてかつ友人宅にいた」とう状況を空想できるかもしれないが、実際にはそんなことは無理である。

ただ、将来技術が進歩して私が自宅にいながら意識を旅行先に持っていくようなことが可能となつたとすれば、ナンセンスであると言いきれなくなるかもしれない。このように論理空間とは完全に固定されたものであると断定さえできない。

「ウィトゲンシュタインは宇宙飛行士であった」(野矢、28 ページ) ことが「可能性として考えられる」(野矢、29 ページ) のに、「富士山一走る」がナンセンスとなるのは、規準の不明確な恣意的な判断であると言えるのではなからうか。野矢氏(ウィトゲンシュタインもか)は時に実現可能性を規準にし、時に想像(空想)可能性を規準にされているのである。では野矢氏は「昨日午後 1 時に A さんは自宅にいてかつ友人宅にいた」を可能性として考えられると判断されるのか、あるいはナンセンスと判断されるのだろうか？(たぶん後者だろうが)

述語論理には「議論領域 (domain of discourse)」というものがある。議論されている範囲をたとえば「人間」というふうを設定した上で命題の真偽を判断するのである(野矢茂樹著『論理学』東京大学出版会、1994 年、96 ページ)。

ここまで説明してきたように、命題の真偽だけでなく命題が論理空間にあるか否かに関しても、前提となるコンテキスト設定、まさに議論領域と同様なものが存在しているのである。述語論理における議論領域についても、「人間」という言葉に対応する具体的対象が明確に指し示されているからこそ論理の真偽が議論されうるのである。

もう一度、野矢氏の説明を見てみよう。

「論考」の場合は関数はただ言語のあり方を整理するための便法にすぎない。それはそれ自身対象となりえるような実質をもたない。ただの入力項たる名と出力項たる命題の対照表にすぎない。いわば、ウィトゲンシュタインは関数を徹底的にノミナルに捉えるのである。(野矢、91 ページ)

ウィトゲンシュタインが解明に用いる関数はそのような言語外の対象をいっさい要請しない。あくまでも言語の中にとどまり、われわれの言語使用のあり方を整理する道具立てにほかならない。すなわち、「ポチ - x 」等の穴あき命題は、名を定義域とし命題

を値域とする、言語内的な関数なのである。(野矢、93 ページ)

・・・この説明に反して、ウィトゲンシュタインの議論は決して「言語内的」なものではなく、言語に対応する対象が明確に指し示されている上で成立する言葉と言葉の関係なのである。

3. そこには言葉(名・命題)と事態しかない～ウィトゲンシュタインの言語観における問題点

ここで、ウィトゲンシュタイン著『論理哲学論考』(野矢茂樹訳、岩波新書、2003年)本文を検証してみようと思う。

下記の説明から、言語に関するウィトゲンシュタインの見解についてどのように解釈すべきなのだろうか? 野矢氏の説明と少し印象が違うように思えるのだが・・・

3.032 「論理に反する」ことを言語で描写することはできない。それは、幾何学において、空間の法則に反する図形を座標で表わしたり、存在しない点の座標を示したりすることができないのと同様である。

3.0321 なるほど物理法則に反した事態を空間的に描写することはできよう。しかし、幾何法則に反した事態を空間的に描写することはできない。

(ウィトゲンシュタイン、23 ページ)

・・・ここで「言語で描写する」とはいったいどういうことであろうか? 私たちは「四辺からなる三角形」「平面において交わる平行線」というふうに言葉を紡ぐことができるのである。そしてそれが実際に存在するかどうか検証する作業を行うこともできる(この一連の行為が「思考」でなくて何であろうか?)。

問題は、「四辺からなる三角形」「平面において交わる平行線」という言葉に対応する事態を描写することができない、ということなのである(上記 3.0321 で示されているように)。もちろん想像することさえできない。まさにこれが論理空間ではないということの証左なのである。言葉はある。しかし事態(もちろん事実も)がないのである。

つまりこれこそが言語表現の有意味性の限界を示すということなのである。有意味とは事態(もちろん事実でも良い)が言葉の「意味」として現れうるということに他ならない。一方、言語表現に対応する事態を描写できない場合、それが無意味・ナンセンスということなのである。

論理に反する＝事態として現れない、ということであり、事態として現れない＝論理に

反する、ということなのである。言語の有意味性、論理空間、可能世界についてこれがすべてである。

しかし、「像」という用語に関してウィトゲンシュタインの説明にブレが見られるように思える。

2.22 像は、描写内容の真偽とは独立に、その写像形式によって描写を行なう。

2.221 像が描写するもの、それが像の意味である。

2.222 像の真偽は、像の意味と現実との一致・不一致である。

2.223 像の真偽を知るためには、われわれは像を現実と比較しなければならない

2.224 ただ像だけを見ても、その真偽は分からない。

(ウィトゲンシュタイン、22 ページ)

・・・「像が描写するもの、それが像の意味である」という説明は不正確ではなからうか。そうではなく**描写したものが像なのであって、像そのものが「意味」**なのである。「像の意味」という表現にウィトゲンシュタインのブレが見て取れる。像が意味でなかったら意味はいったいどこにあるのか？ 「意味」という言葉に対応する対象（事態・事実）はどこにあるのだろうか？

野矢氏の言われるようにウィトゲンシュタインは像と言葉とを混同している節があるのだが、もしそうならば像ではなく「命題」あるいは「名」と言うべきではないだろうか。わざわざ「像」という用語を持ち出す必要は全くない。そして、言葉が描写するものは事態であり（事態でしかない）、事態＝意味ということになる。

しかし「その写像形式によって描写を行う」という文章を見れば、一般的に言う（知覚される）像というものを指しているようにも考えられるのである。このあたり非常にあいまいに思える。

像を後者と捉えれば（本稿ではこちらを採用する）、像＝事態＝想像可能性・描写可能性（像を想像したり描いたりできる）であり（ならばわざわざ「像」という用語を持ち出す必要もないのだが・・・）、事態・像そのものは命題の真偽について語るものではない。命題の真偽は命題と現実との一致・不一致で決定されるものである。

ただ、像を想像した・描いたという”事実”に関して真偽を問われた場合はどうなるであろうか？ 首の短いキリンの絵を描いたとする。「これはキリンである」と（命題として）言語表現したとき、真偽を問うコンテキストを現実世界に置けば（一種の議論領域とでも言えようか）、現実のキリンとは別物であるから「偽」と判断される。

しかし首が短くなってしまったキリンの話を絵本にしたとして、その絵本が描く世界に関して問うのであれば、「この絵はキリンの絵である」は「真」となる。

「Aさんは首の短いキリンの絵を描いた」という命題(?)は、Aさんが実際にそうしたのであればもちろん真である。

さらにウィトゲンシュタインは「シンボル」という言葉を持ち出してくる。

3.31 命題の意味を特徴づける命題の各部分を、私は表現（シンボル）と呼ぶ。

（ウィトゲンシュタイン、29 ページ）

3.317 命題変項に対する値の確定とは、この変項を共通のメルクマールとする諸命題を列挙することである。

値を画定するとは、諸命題を記述することである。

それゆえ、値を画定することはただシンボルにのみ関わり、その意味には関わらない。

値の確定がシンボルの記述にすぎず、それが何を表しているかには触れないということ、値の確定にとって本質的なのはこのことだけである。

（ウィトゲンシュタイン、31 ページ）

・・・シンボルとはいったい何なのか？ そこにあるのは言葉、そしてそれに対応する像・事態しかない。言葉と像・事態しかない場面において、表現・シンボルとはいったい何たりえるのか、ということである。シンボルという「名」に対応する像・事態を描くこともできない（事実として現れることもない）、つまりウィトゲンシュタイン自身の言う「ナンセンス」になってしまっていないだろうか？

像と”表現”しようと、シンボルと”表現”しようと、そこにあるのは言葉（名）と事態だけなのである。もしウィトゲンシュタインがシンボルを命題の部分として捉えようとしているのであれば、それはまさに「名」のことであるし、シンボルを像・事態として捉えているのであればそれは像・事態である。取り立ててシンボルという用語をここで持ち出す意義など見当たらない。

「値の確定がシンボルの記述にすぎず、それが何を表しているかには触れない」というものの、値をシンボル（実質的には「名」）の記述として表現するとき、それを確定するものはその名を用いた命題に対応する（意味としての）像・事態を描けるのかどうかにかかっているのである。

3.32 記号はシンボルの知覚可能な側面である。（ウィトゲンシュタイン、32 ページ）

という説明はまさに言葉と像・事態とを混同しているのではなかろうか。知覚可能なのであればそれは像・事態である。もちろん言葉も視覚や聴覚として（事実として）現れるものである。しかしここにおいて「知覚可能」というのはそういうことではなく、命題（言語表現）の有意味性について問うているのだから、言語表現されたものが知覚可能であるということとは、それが像・事態（あるいは事実）として知覚されうる（想像したり描写したりできる）

ということに他ならない。

こうしたウイトゲンシュタインの見解のブレ・混同について理解した上で下記の文章を読めば、ラッセルのパラドクスの原因というものを明らかにすることができると思う。

3.325 こうした誤謬を避けるために、異なるシンボルに同じ記号が使用されていたり、表現の仕方の異なる記号が同じ仕方で使用されているかのような見かけをもっていたりすることのない、誤謬を配した記号言語、すなわち、論文的文法——論理的構文論——を忠実に反映した記号言語を用いなければならない。

(ウイトゲンシュタイン、33 ページ)

3.326 記号からシンボルを読み取るには、有意義な記号使用に目を向けねばならない。

(ウイトゲンシュタイン、33 ページ)

・・・つまり言葉が同じでも違う像・事態を描写している場合、それらを混同してはならないということである。そしてナンセンスではなく有意義な(=事態が描ける)言葉のみを採用しなければならないのである。

3.33 論理的構文論においては、断じて記号の意味が役割を果たすようなことがあってはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく立てられねばならず、そこではただ諸表現を記述することだけが前提にされうる。

(ウイトゲンシュタイン、34 ページ)

このウイトゲンシュタインの主張に反して、記号(というか命題や名)の意味(=像・事態)を考慮するからこそ誤謬を防ぐことができる。言語によって指し示された諸表現が記号の意味となるのである。

ラッセルの誤りは「記号の規則を立てるのに記号の意味を論じなければならなかった」(ウイトゲンシュタイン、34 ページ) ことではなく、同じ言葉だが異なる意味(=事態)を持つものを同じように扱ってしまったという誤謬にあるのだと言えよう。



4. (見せかけの) 自己言及文において「定義域が変化する」「関数は同一ではない」とは具体的にどういうことなのか

再び野矢氏の『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』に戻ろう。

定義域 D をもつ関数 F において、その関数それ自体をその定義域 D に繰り返す。その結果、定義域は変化するが、定義域のその変化を通じて関数 F は同一とあるとみなされる。そのとき、自己言及文 $F(F)$ が得られることになる。他方、ウィトゲンシュタインの言い分は、定義域が変化したのだからもはやその関数は同一ではない、というものである。それゆえ、一見自己言及文に見えるものは、実は $F'(F)$ であり、決して自己言及文ではない。(野矢、98 ページ)

私自身の見解としては、ウィトゲンシュタインの言い分はもっともだと考えるが、もっと具体的に考えてみよう。

「犬である」あるいは「犬」という言葉のみを対象とするのであれば、それはただの「犬」という文字のことかあるいは「いぬ」と発音された音声となる。ただの文字や音声ならばそれはもちろん犬ではない。「犬という概念(言葉)は犬ではない」ということになる。

しかしこの場合ウィトゲンシュタインの言うように自己言及文ではなくなっている。なぜなら主語は文字・音声であり、述語は犬と呼ばれる実在の動物を指し示すものとなっているからである。

まさに同じ言葉が違う意味合いで用いられているにもかかわらず、同じものとして扱う誤謬が生じているのだ。一種の言葉のトリックとも言えよう。

一方、主語も実在の動物を指し示すものとして捉えたとすれば、「犬は犬である」というただのトートロジー的表現に結果としてなってしまう。これを述語づけることができるのかどうかは非常に怪しいと言わざるをえない。

「ポチは犬である」という命題における対象はそこにいる犬一匹を指し示しているが、「犬」という言葉は、この世の中に住んでいるすべての犬、あるいはそのうちのどれかの犬のことを指すものである。そして「犬」という言葉の持つ意味を変化させずに自己言及文を作ろうとすれば、(繰り返すが)「犬は犬である」という表現になってしまうだけなのだ。

述語が名詞の場合はこのように分かりやすく説明できるのだが、形容詞などの場合少しややこしい。

「曖昧」という概念は曖昧さの基準が明確ではないため、それ自身曖昧な概念であると考えられる。だとすれば、『曖昧』という概念は曖昧であると言える。すなわち、自分自身に述語づけられる事例となっている。(野矢、83 ページ)

「芸術という概念は曖昧である」と言う命題に関して、曖昧とは芸術と呼ばれる行為や作品の範囲が明確に線引きできないようなものであることを示していると思う。その時、「曖昧」という言葉は芸術（行為や作品）という対象を指している（と思われる）。もし「曖昧という概念」が主語になったとき、どうなるであろうか？

もし「曖昧という概念」が「曖昧」という「言葉」のみを指しているのであれば、そこに（「曖昧」という言葉が指す）対象は存在しない。「曖昧」という言葉自体が対象となる。「曖昧」という言葉に対応する言語外の対象（つまり「曖昧」という言葉の意味）は除外されている。そうであれば「曖昧」という漢字、あるいは「あいまい」と喋る音声、それ自体に対し「曖昧である」とか「曖昧でない」とか判断のしようがないのではないだろうか。

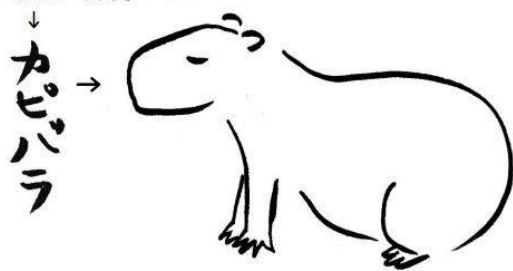
つまり『「曖昧」という概念は曖昧である』とは真偽を問えない命題、一種のナンセンスと言えるかもしれない。そもそも自己言及文にさえなっていない上に、述語づけることができている事例とさえ言えない。野矢氏の見解とは真逆になる。

「曖昧という概念」が「曖昧」という言葉の対象を含むと考えればどうだろうか？ 「曖昧」という言葉の意味を考えると、どうしても「曖昧」のみで完結することができない。ある人の言うはっきりしない発言や態度、何を芸術と呼ぶのか明確に線引きできない状況、絵の輪郭がぼやけていて何を表しているのかわかりにくいような状況・・・そういった個別の具体的状況を想像する以外に「曖昧」という言葉表現する方法はないのである。「曖昧」という言葉の意味を辞書のように文章で説明することはできる。しかしその文章が何を示しているのかと問えば、結局それらも具体的・個別的状況（要するに事態や事実）として指し示すしか他に方法がないのである。

つまり述語を考えると、どうしても主語的な何かが必要となってくる（これがタイプ理論を考える際の一つの根拠づけになりそうではある）。そういう場合、より正確には「曖昧（なもの・状況）は（やはり）曖昧である」というふうになんかのトートロジー的表現に結局は収斂されてしまうように思えるのである。そしてこれも自己言及文とは言えないのではないか。

このように具体的に考えてみれば、野矢氏の説明に様々な混同・誤謬が含まれているのが明らかになって来る。ラッセルや野矢氏は、言葉の意味をすり替えることで見せかけの自己言及文を作り出しているだけなのである。

カピバラという文字



5. そもそも $\omega(\omega)$ 、 $x(x)$ という関数は成立しうるのか

まず、ラッセルのパラドクスについて野矢氏の説明を見てみよう。

述語 ω を関数の形で $\omega(x)$ と書くことにする。すなわち、 $\omega(x)$ は「 x は自分自身に述語づけられない述語である」という命題関数である。「 x は自分自身に述語づけられない」というのは「 $x(x)$ ではない」ということにほかならない。それゆえ、こうなる。

「 $\omega(x)$ 」は「 $x(x)$ ではない」に等しい。

ここで、ラッセルの指示に従って変項 x に ω を入れる。すると、こうなる。

「 $\omega(\omega)$ 」は「 $\omega(\omega)$ ではない」に等しい。

かくして肯定と否定が等しくなってしまう。これは矛盾となる。(野矢、83～84 ページ)

・・・「 x は自分自身に述語づけられる」という文章自体がナンセンスになるか、見せかけの自己言及（同じ言葉を違う意味で用いることで自己言及文のように見せかけているだけ）か、単なるトートロジー的説明になってしまうか、どれかであることは前章で説明した。そもそも上記の論議自体が成立しないのである。

もちろん、述語 ω を関数の形で $\omega(x)$ と書くことができるのか、という問題もある。述語 ω とは「曖昧（である）」とか「犬（である）」とかいう具体的な言葉（あるいは意味・対象を伴う言葉）である。 $\omega(x)$ と書き換えたとき、 $\omega(x)$ = 「 \sim は自分自身に述語づけられないような述語である」という論理に変化している。

つまり述語としての ω と関数としての $\omega(x)$ とは ω の文字が一緒だとしても全く別物なのである。同様に $\omega(x)$ の x も ω になりえない。 x は特定の言葉が入る場所、 ω は「 \sim は自分自身に述語づけられないような述語である」という関数なのである。つまり x に ω を代入するということが自体、（先に示したような）ニュアンスの恣意的な変更であるのだと言える。

「 x は自分自身に述語づけられる」という命題関数を $x(x)$ と表記するのも同じである。 x と文字は同じでも、それが表現する意味合いが全く異なるのである。まさに下記のウィトゲンシュタインの指摘のとおりである。

二つの関数に共通なものは文字「 F 」にすぎない。だが文字はそれ自体では何も表さない。(ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』35 ページ、3.333 より)

(この点についてはウィトゲンシュタインの考えと少し異なるかもしれないが) 文字そのものが指し示す対象がいかなるものか、そこを正確に把握すれば自己言及文が見せかけのものであることが露呈するのである。

正確に関数として表現するのであれば、

$F(x,y)$ = 「 x を y に述語づけることができない」

$G(x,y)$ = 「 x を y に述語づけることができる」

そして $F(x,y) \equiv \neg G(x,y)$ 、さらに $F(x,x) \equiv \neg G(x,x)$ となるだけである。述語づけられないものは述語づけられないし、述語づけられるものは述語づけられるのである。

しかしいくら論理をこねくり回したところで、述語を述語づけるということが実際に出るのかと言えば、(既に説明してきたとおり) できそうにもないのであるが。

一見自己言及文に見えるものは、実は $F'(F)$ であり、決して自己言及文ではない。(野矢、98 ページ)

・・・とウィトゲンシュタインが言うように、自己言及文に見えても実際のところ自己言及文ではないのである。

<引用文献>

野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』筑摩書房、2006年

ウィトゲンシュタイン著『論理哲学論考』野矢茂樹訳、岩波新書、2003年

野矢茂樹著『論理学』東京大学出版会、1994年